

## 埼玉県東部，特に菖蒲町付近の地理学的考察 農業を中心として

渡 辺 勝 江

埼玉県東部は水田地帯であると同時に埼玉梨の産地となっている，論文においてはまず主要作物について，次に複合経営について考察するとともに，最近の農業構造の変化を考えてみることにした。地域としては，菖蒲とそれに隣接した久喜，蓮田，白岡の四市町をとりあげた。

本地域は埼玉県のなかでも水田率が高い地域で（久喜83%，蓮田65%，白岡74%，菖蒲74%，県平均57%），水稲が基幹作物となっている。用水系統は非常に複雑であり，用排水路は網状に交錯している。用水のうち，この地域に重要な役割をはたしているのが見沼代用水である。見沼代用水から取水されていないところでは揚水機及び堰による排水の反復利用がおこなわれているが，こうしたところでは見沼代用水流域ほど安定した水量は得られない。

水稲を基幹とした複合経営がおこなわれているが，特に梨栽培はさかんで，埼玉県全体のほぼ半分を産している。水田地帯にあり，畑が少なく，梨園は自然堤防上あるいは洪積台地上に散在している。梨にとって過度水分は害となるので，暗渠排水などをおこなうことが望ましいが，散在していることからその事はむずかしく，ほとんどおこなわれていない。

したがって，多肥栽培や栽培技術の向上により収益を上げる方向にある。最近では生産性の高い野菜栽培に転換されたり，都市化の影響を受け宅地となったりして，栽培面積はわずかずつではあるが減少している。

それに対し，高度成長期以降さかんになったのが施設園芸である。地域内では昭和40年以降の増加が著しく，品目別にみるとそのほとんどがいちごである。いちごは水田の裏作として栽培されるので，水田地帯であるこの地域に導入されやすかったものと思われる。

また高度成長期以降の農業労働力の流出は全国的におこった現象であり，この地域においても例外ではなかった。流出したのは主に男性であり，若年層であった。そのため農業労働力は量的にだけでなく，質的に悪化した。農家数の減少は農業労働力の減少よりゆるやかで，労働力の流出は不完全な形でおこなわれ，専業の激減，第2種兼業農家の急増となって表面化している。ことに東北本線に沿った市町でその傾向が著しい。この地域の兼業の特色は通勤兼業である。大都市に近く，労働市場，交通条件等に恵まれているので，出かせぎはきわめて少ない。

都市化の進展は，昭和35年以降急激な人口増加を示すようになった東北本線に沿った市町にお

いて顕著にみられるが、全般的には農業的色彩の強い地域だといえよう。ことに葛蒲においてその傾向が強い。

## アメリカの都市分布 産業面からの考察

表 朝 子

この題目を選んだ動機は、アメリカという国への興味である。たしかに、アメリカについての知識は、一般に普及しているといえるが、その多くは散文的であり、また、フィクションにもとづいた類推であったりして客観性が乏しいもののように思える。そこで、何かしら確実な理解を、とってこの論文にとり組んだ。内容の概略は以下の通りである。

まず、序論では方法論として、都市と産業との関連を考察するにあたって企業分布調査をその手段とすること、また、資料として何を使うかについて述べた。第1章では主な業種がどの都市に分布しているか、またその地域的かたより（東部か、五大湖沿岸かなど）はどうかについて考察した。

さらに第2章では、企業数・売上高が集中している都市について考察を行った。この章の冒頭の部分では、上述の意味での「大都市」と人口との関係について調べ、人口の順位と売上高の順位との間にはやや低い相関関係がある、と結論づけられた。続く部分では、売上高の特に多い都市について、業種やその売上高の構成について調べた。そのうち、売上高合計首位の New York は、その構成業種数や企業数においても抜群であり、売上高合計は多いが、企業数や特に構成業種の著しく少ない Detroit とははっきりした対照を示している。

さて、本論文のねらいはアメリカの都市についての理解、特に産業面からのそれであったが、作業を進めていくうちに方法が不適切であることが明らかになってきたために、結論の部分は「結論に代えて」とし、その方法上の誤りを検討するような内容となってしまった。方法上の誤りとはすなわち、企業本社を調査対象としたことである。ひとくちに「産業」といっても、ここで扱ったものは企業本社のみであるため、産業が都市やそれを含む地域の経済活動にどのような役割を果たしているか、という、この論文の実質的な目標にとっての手段としてはひどく迂遠なものとなってしまった。つまり、企業本社の分布のみを調べたのでは、原材料・商品・労働力などを媒介とした、